

Erörterung über die Beteiligten des ehemaligen
DDR-Sportsystems -mit besonderer
Berücksichtigung der Autobiographie von Helmut
Recknagel-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23757

旧東ドイツスポーツ関係者の言説

—Helmut Recknagel の自伝を中心に—

寶學 淳郎

Erörterung über die Beteiligten des ehemaligen DDR-Sportsystems — mit besonderer Berücksichtigung der Autobiographie von Helmut Recknagel —

Atsurou HOUGAKU

研究の目的

ドイツ連邦共和国（以下、1990年以前は西ドイツ、以後はドイツと表記）では1990年のドイツ統合後、「ドイツ民主共和国（以下、東ドイツと表記）のスポーツとは何であったのか？」「東ドイツスポーツを近代ドイツスポーツ史にどのように位置づけるのか？」を明確にするために、東ドイツスポーツ史の再構成が企図されてきた。東ドイツ時代に書かれた教条主義的なスポーツ史叙述に対する懐疑があったからである。

1990年代後半になって、ポツダム大学等を中心として進められた東ドイツスポーツ史に関する研究がまとまった成果として出された。その一つ旧西ドイツの Spitzer らによって編纂された『東ドイツスポーツの鍵となる文書：オリジナルな史料によるスポーツ史的概観』（1998年）は、東ドイツスポーツの発展を転換期を中心に跡づけ、その輪郭を明確にするものであった¹⁾。同書では、伝統的なフェラインの禁止とスポーツ諸組織の政治的支配、党によるスポーツ支配を確実にしたメカニズム、シュタージ、ドーピング、内密の競技スポーツの助成、ディナモなどの分派、サッカーの偏重など、主に東ドイツスポーツのネガティブな側面に焦点があてられている。

その後ドイツでは、東ドイツスポーツ史を新しく如何なる形で叙述しようとするかに関する

論議が1999年に生じた。この論議の焦点の一つは、東ドイツスポーツ史再構成への東ドイツスポーツ関係者の関与をどこまで認めるかである。これは現代史研究における悩ましい問題であるが、今後の研究の方向性を見極めるためにも、我々は東ドイツスポーツ関係者の考えや主張を蔑ろにせず、また知る必要があると思われる。

このような動向を意識しつつ、本研究は、ドイツ統合から現在までに旧東ドイツスポーツ関係者によって出された自叙伝的著作の分析を中心に、彼らが東ドイツスポーツ及びその周辺について語ろうとしたものを検討するものである。ここで自伝ではなく自叙伝的著作と用語を用いているのは、これらには、「自ら書いた自分の伝記。自叙伝」²⁾以外のものも含まれているからである。これらの著作について、2001年に Becker は、旧東ドイツのスポーツマン、トレーナー、幹部、ジャーナリストが東ドイツスポーツ発展に関するその個人的見解を詳述したことは歓迎すべきことであり、それらは、時代の証言者へのインタビューとともに、清らかな公文書研究に対し、方法論上避けがたい修正を示したと述べる一方で、風当たりの強い当事者に対するインタビューを纏めた出版物については、主観的な証言もみられることを指摘している³⁾。国家崩壊後批判に晒された当事者による著作の取り扱いには注意を要するが、東ドイツ

時代には語られることのなかった言説は、今後東ドイツスポーツ史を考えるうえで示唆を与えるものであろう。

一方、わが国では、東ドイツスポーツ史研究は十分には進んでいない。現代ドイツスポーツ史研究の代表的文献である高津勝の『現代ドイツスポーツ史研究序説』（1996年）では、ソビエト占領地区、東ドイツ、ドイツ統一にかかわるスポーツ史的事実が視野の外に置かれ、ドイツ統合後の代表的文献である藤井政則の『スポーツの崩壊—旧東ドイツのスポーツの悲劇—』（1998年）は、東ドイツスポーツの歪んだ民主集中制やシュタージとの関係などを明らかにし、多くの示唆を与えるものであるが、これらの自伝的著作については触れていない。

わが国の研究状況も踏まえ、筆者は、旧東ドイツスポーツ関係者の自叙伝的著作について、ドイツ統合後から1998年までに出された主な5冊の著作⁴⁻⁸⁾を取り上げ、これらの中で、著者達が東ドイツスポーツ及びその周辺の何について多く論じているのか、それをどのように論じているのかを明らかにし、先行研究や同時期の研究と比較のうえで、その特徴について検討した。同研究で明らかになったことは、主に次のことである。1.これらの中で、東ドイツスポーツに関連して多く述べられていることは、競技スポーツ、大衆スポーツ、党のスポーツへの干渉、自立性のないスポーツ組織、ソビエトの影響、スポーツと外交、ドーピング、シュタージ、サッカーの偏重、ステートアマ、メディアとスポーツ、国家崩壊とスポーツなどに関することである。2.これらの個人的見解は東ドイツ時代には語られなかったものや公文書などでは知り得ないものが多く貴重と言えるが、著者達の東ドイツ時代の職や地位も反映され、類似、相異がみられる。3. Spitzer らの著作と同様、これらにおいても、東ドイツスポーツのネガティブな側面についても多くのことが語られている。4. 一方、これらでは、東ドイツスポーツに対するネガティブな側面の強調、一面的理解、全般的批判

に対して多くの反論もみられる。5. 東ドイツのスポーツシステムの独自性に関する叙述、第二次世界大戦以前のドイツスポーツとの連続性を窺わせる叙述、スポーツの政策的意図と民衆のスポーツに対する意識の差異を窺わせる叙述も見られる⁹⁾。

これらの著作は1999年以後も出版されている。我々はそれらにも目を向ける必要がある。東ドイツが消滅し、暫く時を経たいま、社会主義の模範といわれ、スポーツ分野でも世界の注目を集めた「東ドイツのスポーツとは何であったのか」という問題をネガティブな側面だけに偏らず冷静に分析できるチャンスが生み出されているように思われるからであり、社会主義革命がスポーツにもたらした遺産、20世紀のスポーツの意味、現存する社会主義国家や資本主義国家のスポーツを考えるためにも、公開されつつある公文書の分析とともに、主観性や虚構性などに留意しつつ自叙伝著作や時代の証言者の声にも耳を傾け、慎重に時間をかけて東ドイツスポーツ史研究を進めるべきと考えからである。

本稿では、東ドイツスポーツ界のスターの一人 Helmut Recknagel によって著された『姿勢の問題—思い出』（2007年）の内容を紹介しつつ、主に東ドイツスポーツにかかわる叙述を検討したい¹⁰⁾。

I. Helmut Recknagel について

ここでは、日本では馴染みのない Recknagel について、簡単に紹介しておきたい。

1. スキージャンプ選手としての活躍

1937年3月20日チューリングゲン山地のシュタインバッハーヘレンベルクに生まれた Recknagel は、最も成功したドイツ人スキージャンパーの一人である。1957年3月3日、Recknagel はノルウェー・オスロで開催される伝統あるホルメンコーレンの大会において、その最初の国際的成功を祝った。19歳にして参加した彼は、濃い霧という悪天候の下、ノルディッ

クスポーツのメッカにおいて、スカンジナビア人以外として、初めて勝ったのである。そして、1960年のスコー・バレー冬季オリンピック大会（アメリカ）において、Recknagelは最初のドイツ人として、またスカンジナビア人以外で初めて、スキージャンプ競技のオリンピック勝者となった。その時はまだ東ドイツは単独でオリンピックに参加することができなかったため、彼は統一ドイツチームのメンバーとして参加した。この金メダルは当時一般的でないジャンプスタイルでもたらされた。それは、「スーパーマンポーズ」と呼ばれ、腕を前に伸ばすという独特のものであった（図1参照）。1962年、彼はスキージャンプ世界選手権大会に勝ち、東ドイツ年度スポーツマンに選出された。この選出は、東ドイツスポーツ界で最も人気の高かったGustav-Adolf Schurの連続選出記録を阻止するものであった。その他、彼は3度（1958年、1959年、1961年）、有名な4シヤンツェ・ツアーに勝っている。この記録を上回る者は、現在まで3名を数えるだけである。1964年5月、彼は選手としてのキャリアを終えることを決めた。

2. 選手キャリア後の職業とスポーツへのかかわり

東ドイツにおいて有名選手は、選手キャリアを終えた後、トレーナーになる者が多かったが、Recknagelは獣医を志し、1973年に博士号を取得した。その後、彼は獣医として働くとともに、1970年から1990年まで東ドイツオリンピック委員を務め、1990年にはドイツオリンピック委員となった。また、彼は1990年代初めまでジャンプの国際審判であった。ドイツ統合によって獣医を失業した彼は、紆余曲折の後、ベルリンに健康ハウスを開設し、1996年企業家となった。2007年は彼のオスロでの成功50周年にあたり、彼は3月ジャンプ大会に名誉ゲストとして出席し、当地のスキー博物館に1957年に成功をおさめたスキーを寄贈した。

図1：Recknagelの独特なジャンプスタイル
(1961年1月)



（出典：Recknagel, H., EINE FRAGE DER HALTUNG. ERINNERUNGEN. Berlin, 2007, S. 161.）

II. 同書の構成と概略

同書は13章で構成されている。以下では、各章の概要を簡単に述べておきたい。

第1章：(Rastelli)では、質素な民衆の出であったことなど自身の簡単な紹介の後、70歳に際して思い出をスポーツの榮譽を中心に紙とするように幾つかの方面から求められたと、同書出版の経緯が述べられている。思い出について、Recknagelは、すべての思い出は主観的のみならず、偽りのものかもしれないと述べつつも、彼が幼い頃憧れたRastelli（同時に10個のボールを操ったとされる人物）のように意識的に自分を演出しようとはしないと、自伝を書くにあたっての姿勢を述べている¹¹⁾。

第2章：(Recknagel)では、生まれ、当時の状況、家族、彼の児童期の様子がまず述べられている。Recknagelは、並の生徒で人気者ではなかったが、自身を父の几帳面な性格を受け継ぎ、規則正しい生活をし、行儀の良い生徒で、自分がそれに価値を見いだしたとき勤勉であったとしている。次に、熟練工教育を経て、1954年にチューリングンのボールベアリング工場働くまでの過程が述べられている。スポーツとのかかわりについては、父の影響と援助による早い時期からのスポーツの開始、陸上、サッカー、水泳、スキーなどの活発なスポーツ活動、初めてのスキージャンプ、隣人の運動指導者Pfannschmidtとの出会いとスポーツ能力の開花、西ドイツでのサッカー選手という憧れと父

の反対、冬季スポーツの拠点ツァラーメーリスのトレーナーRennerとの出会いとスキージャンプへの勧誘などが述べられている。その他では、東ドイツスキージャンプはとても弱く長期的な選手養成が必要であったことなど、当時の状況も述べられている¹²⁾。

第3章：(Renner)では、Rennerの指導の下、Recknagelが本格的にスキージャンプに取り組んでいく様子が練習や大会を中心に述べられている。基礎的なトレーニング、Rennerが開発したプラスチックマットでの夏期練習(雪がない夏でも跳べ、技術的リードをもたらす)、最年少代表選手(17歳)としてのジャンプ週間への参加(1955年3月)、オリンピック直前の代表漏れ(1955年末)、新しいトレーナーPeterの指導下での練習、オリンピック直後の東ドイツ選手権での活躍(3位)、ハンガリーやスエズで起きたことを気にせず取り組んだホメンコーレン大会を目指した練習などである。これらの叙述からは、東ドイツ初期のスキージャンプにおけるトレーニングや試合、他の代表選手の様子や彼らの引退後の生活、当時の用具、東ドイツの冬季スポーツ政策、ジャンプスタイル、シャンツェの様子なども窺える。Recknagelが代表を逃したコルチナダンペッツォ冬季オリンピック大会はIOCによる東ドイツNOKの承認を経て東ドイツが統一ドイツチームとして初めて参加したオリンピックであり、スキージャンプではGlassが第3位となり、東ドイツに初めてのオリンピック冬季メダルをもたらした。この大会への代表落ちとRennerのその後の振る舞い(Recknagelは高い地点が怖いと新聞に嘖りちらした)について、Recknagelは人生の大きな失望と語っている。その他、チーム仲間を茶化したことはなかったという叙述からは、Recknagelの生真面目な性格が窺える¹³⁾。

第4章：(ホルメンコーレン)では、世界的に名高いホルメンコーレンでのスキージャンプ大会、1957年のRecknagelの参加とその勝利が主に述べられている。Recknagelはこの勝利を彼

にとっての最重要の勝利と位置づけている。Recknagelは当時19歳であったが、ジュニアの部ではなく成人の部で優勝した。この勝利はまた中部ヨーロッパ人初の勝利であり、北欧時代の終焉を意味したが、ホストはフェアであり、勝者を尊敬したと、当地の雰囲気も述べられている。続いて、Recknagelはプラニカ(当時のチェコ・スロヴァキア)で行われた国際ジャンプ週間でも優勝し、祖国を狂喜させた。その他、同章では東ドイツのスポーツ用具の発達についても述べられているが、Recknagelはその経験から、スキージャンプではジャンパーの身体的、精神的コンディションによって勝負は決まるとも述べている¹⁴⁾。

第5章：(スキージャンプ週間)では、まず、戦後スポーツにおける東ドイツの国際的孤立とスキージャンプ週間の成り立ち、ドイツ社会主義統一党(以下、SEDと表記)第一書記Ulbrichtによる積極的な冬季スポーツの促進、東ドイツにおけるスポーツ選手への期待と圧力、冷戦の激化とスポーツへの影響などが述べられている。その他、この時期にRecknagelが国籍を移すことやプロとなることを勧誘されたことや、当時のスキークワールドカップの状況、選手やジャンプスタイルについても述べられている¹⁵⁾。

第6章：(スコー・バレー)では、Recknagelの1957/1958年以降の目標であったスコー・バレー冬季オリンピック大会(1960年)までの様子(1年前にはアメリカ行きのビザの発行を西ドイツが拒否したこと、統一ドイツチームの開幕式旗手にRecknagelが選ばれたこと¹⁶⁾等)、大会の様子(アメリカが東ドイツのトレーナーとジャーリストの入国を拒否したこと、一週間前まで東ドイツ選手がシャンツェに入れなかったこと、東ドイツ選手やRecknagelの精神的身体的状態、Recknagelの優勝、多くの祝電)が中心に述べられている。冷戦がスポーツへの影響を及ぼす中、アメリカで行われたこの大会で勝利したRecknagelは次のように語っている。東

西両ドイツの些細な対立、アメリカ管理局の入国拒否さえ、幾分かっぼけなものとなった。スコア・バレーでは短期間、冷戦のことは決して感じられなかった。このような気持ちの良い感情が私を動機づけた。平和で、フェアな世界のために戦うことを。戦争のない生活は可能であり、人間は一つのファミリーである。その他、同章では、祖国への帰国と歓迎、次の大会への参加などが述べられている¹⁷⁾。

第7章：(スポーツ後の人生)では、1960年後に **Recknagel** が選手キャリア後の人生を考え始めたこと、1962年に結婚したこと、人はドイツ体育大学で学び大学卒のトレーナーとなることを勧めたが、彼は自身で決断し、獣医の勉強をし、学位を取り、1973年に仕事を開始したことが中心に述べられている。すべての決定を自分自身で、他に依存することなく行った、更に形式主義に幾分逆らう者であった、と彼は自身について述べている。東ドイツの有名スポーツ選手で引退後獣医となった者は希有と思われる。知識は不足していたが、スポーツを通じて沢山の忍耐力とやる気を備えていたと、**Recknagel** はこの頃について述べている。スポーツとのかかわりについては、ジャンプ引退後、彼は一時スポーツから遠ざかっていたが、再びスポーツにシンパシーを感じるようになったこと、1973年国際スキー連盟が彼を国際審判として任命した後には再び内外のジャンツェに出るようになったことなどが述べられている¹⁸⁾。

第8章：(着陸滑走路において)では、まず、西ドイツの連邦裁判所が東ドイツのドイツツルネン・スポーツ連盟(日本の体育協会に相当、以下、DTSBと表記)を違憲組織とし、統一ドイツチームの存続が危ぶまれるなど、冷戦のスポーツへの影響が増す過程において、ホルメンコーレンでの2度目の勝利、ジャンプ週間での3度の総合優勝、ジャンツェレコードなど**Recknagel**の好調が続いたことが述べられている。1957年の世界選手権優勝者フィンランドのKärkienは次のように語っている。**Recknagel**は

すべての時代のベストジャンパーだ。もの凄い飛行センス、爆発的な踏切、並外れて確かなランディング、彼は望むようにそのジャンプを配分することができる。また、4ジャンツェ・ツアーの共同創設者の一人は、彼はツアーのベストでありいつも好感が持て人間的であると**Recknagel**を評している。一方、**Recknagel**は、このような好調の中でも、もう遠くへは飛べないのではという気持ちも常にあったことを述べている。そして、同章では、2度目のオリンピックであるインスブルック大会の様子が主に述べられている。身体的には最高であったが、頭の方はそうではなかったと、**Recknagel**は当時の状態を述べている。結果はメダルに届かないという、**Recknagel**自身、スポーツ幹部、そしてファンを失望させるものであった¹⁹⁾。

第9章：(新しい始まり)では、まず、DTSB会長Ewaldの**Recknagel**に対する執拗な行為と選手キャリア後の**Recknagel**の不安、Honecker時代に生じた勲章の洪水、東ドイツの国家的崩壊の**Recknagel**への影響、東ドイツスポーツ史再構成への**Recknagel**の考えなどが述べられている。その他同章では、**Recknagel**が1960年のオリンピック優勝の2ヵ月後に報酬を渡されたこと、60歳を過ぎても誠実にスポーツにかかわり続けたこと、故郷やその人々に好意やシンパシーを感じ、なお交流を続けていることなども述べられている。東ドイツの崩壊について、**Recknagel**はそれが国家的に失敗したことを認めつつも、自分の運命に不満を抱かないし、その時まで生きてきた自分の人生に決して後悔しないと述べている²⁰⁾。

第10章：(ハーゼンタールにおいて)では、**Recknagel**の故郷ハーゼンタールのスポーツの伝統と土壌、国家崩壊後の東ドイツで過ごした人々の失敗者としての位置づけ、現代ドイツジャンプの問題と**Recknagel**の考え、自分自身に対する評価、児童・青少年スポーツ学校の見直しなどが述べられている。東ドイツで過ごした人々＝「失敗者」という位置づけに対しては、

根本的に我々は自身の信念に誠実であることは変わらない、我々は恥じるべきであろうか、と **Recknagel** は述べている。現代ドイツジャンプの問題については、東ドイツ出身のトレーナー **Hess** の成功と彼が去ってからのドイツチームの低迷が述べられている。**Hess** は選手に対しまず国家的課題としてのスポーツを求め、監督し、責任を負い、自由余地も認め、選手が落ち着いてトレーニングできる環境をつくり、成功した。しかし、**Hess** が去ってからは、選手はスポーツのみが問題ではなくなり、技術的進歩を逃したと、**Recknagel** は選手がスポーツに真摯に専念しない状況を問題視し、また、良い成績を出せない選手にスポンサーがつかない状況も問題視している。自分自身について、**Recknagel** はスポーツのみの人生を送ってきたとは思っていないが、スポーツで評価されるだろうと語っている。その他、東ドイツスポーツを支えた児童・青少年スポーツ学校が近年ドイツにおいて見直されていることについても述べられている²¹⁾。

第11章：(70歳に際する70の質問)では、**Recknagel** に対する70の質問とそれに対する回答が記されている。とりわけ、ドーピング、東西ドイツスポーツの検証に関するなどが興味深く感じられる。ドーピングに関しては何か思うか?という質問に対し、原則的に答えることを拒否しているとしながらも、**Recknagel** は、ドーピングなしの最高のパフォーマンスは可能である、健康が最高の善である、ドーピング論議はメディアでヒステリックになされているが進歩はない、医学的援助は存在する、度々のコントロールと厳罰を支持するなど述べている。東西ドイツスポーツの検証については、比較する努力の価値のあることとしながらも、内省や改心も必要であり、現在国民の大部分は意志も能力もなく、それ故支配者もしないであろうと **Recknagel** は述べている²²⁾。

第12章：(1880年からのジャンプスタイルの発展)では、写真をまじえ、その発展の様子が簡単に述べられている²³⁾。

第13章：(郵便ファイルから)では、**Recknagel** が定期的に長く手紙を受け取ってきたこと、ファン、かつてのライバル、友人からの数枚の手紙の紹介が主である。そこからは、彼が長く愛されるスポーツマンであること、ジャンパーの性格(しばしば我が儘で、少しエゴ)、**Recknagel** の性格(真面目すぎるほどスポーツに打ち込んでいた)などが感じられる。最後に、**Recknagel** は、スポーツでも、人生でも少し真面目に生きすぎてきて、楽しみでは損をしていると、自身について述べている²⁴⁾。

III. 東ドイツスポーツに関する叙述とその特徴

ここでは、同書で主に東ドイツスポーツ及びその周辺について多く述べられていることを項目別に整理し、主に1998年以前に出された自叙伝的著作と比較、検討したい。

1. 競技スポーツ

1) スキージャンプ競技の初期段階の諸相

世界で注目を集めた東ドイツの競技スポーツに関して、同書で最も多く述べられていることは、戦後から1960年代半ばまでの冷戦下におけるスキージャンプ競技の諸相である。**Recknagel** は、国内外における実際のトレーニングや試合、統一ドイツチームの様子や雰囲気を生々しく叙述しているが、それらからは、ドイツスキージャンプの歴史的伝統、東ドイツ建国当初の競技水準の低さ、地域運動指導者の活動、トレーニングの改良、冬季スポーツ拠点におけるトレーナーの指導、選手の選抜、用具・施設の開発などが窺える。また、実際にかかわった者しか知り得ない選手らの地道な取り組みや心情も窺え、示唆的である。

2) 競技スポーツ促進の理由

競技スポーツ促進の理由について、**Recknagel** は、東ドイツのスキージャンプが東ドイツ建国(1949年)当初とても弱く、長期的な選手育成が必要であったことなどをあげている。

3) 競技力の向上をもたらしたもの

建国当初は低かった東ドイツスキージャンプ

の急激な競技力向上の理由について、Recknagel は、規則的計画的継続的トレーニングの結果であるとし、国家及び国家指導者 Ulbricht²⁵⁾ による積極的な冬季スポーツの促進（学校でのジャンプの助成、児童・青少年スポーツ学校の助成、冬季スポーツ拠点の確立、優秀なコーチの配置）、タレントの発掘、用具・施設の改良、トレーニングの改善、優秀な成績を収めた者への報酬・表彰制度、古い世代の経験の伝達などをあげている。とりわけ、半世紀に渡りスキージャンプに接してきた Recknagel の古い世代の経験の伝達という指摘は従来になく興味深い。Recknagel は、ジャンプのような競技には古い世代の経験が必要であり、例えば Weißflog²⁶⁾ の世代はそこに属していなくても若者から離れてはならないと提言している。

4) 競技スポーツの問題

競技スポーツに関して、従来の著作は、成果・記録主義への傾斜、秘密裏の助成などを問題視しているが、Recknagel は、競技スポーツの問題として、スポーツ選手への期待と圧力の大きさとともに、オリンピックメキシコ大会後及び Honecker²⁷⁾ 時代に生じた表彰や勲章の洪水をあげている。後者について、Recknagel は、過去のスポーツの成果がそれによって引き下げられると感じ、反発したと述べている。

2. 大衆スポーツ

1) 指導者の大衆スポーツ軽視

競技スポーツに対し遅れが指摘されている東ドイツの大衆スポーツについて、従来の著作はその遅れを認めるとともに、国家指導部や DTSB 指導部の大衆スポーツ軽視などを問題視しているが、Recknagel はこの問題に触れていない。

2) 地域の運動指導者

Recknagel は、子供の頃、隣人の運動指導者 Pfannschmidt と出会い、スポーツ能力の開花させていった述べているが、このことは、東ドイツ建国間もない頃からすでに、地域に優秀な運動指導者が存在していたことを窺わせる。

3. 党のスポーツへの干渉とスポーツ組織の問題

1) 党のスポーツへの干渉

東ドイツは事実上一党独裁体制にあった。従来の著作において、党によるスポーツの干渉に関して批判されているのは、党によるスポーツの独占、スポーツの手段の利用や統制、サッカーの優遇、促進スポーツ種目の区分、シュタージュによるスポーツの監視、メディア規制などである。Recknagel は、同書全般を通じ、スポーツの政治的利用などについて厳しく批判している。

2) スポーツ組織のヒエラルヒー

Seifert は、1961年から1989年までの長きに渡って DTSB 会長の職にあり、党指導部とも結びついていた Ewald²⁸⁾ に対し、次のように厳しく批判している。彼の権力は絶対的であり、気に入らない者は排除された。彼のつくったスポーツにおけるヒエラルヒーは、社会主義社会のつくった墮落したものであった。Recknagel も Ewald に対しては厳しく批判している。一つは、インスブルック大会でオリンピック連覇を逃したときの Ewald の態度である。Recknagel は、次のように述べている。最後のジャンプのあと、滑走路の下で、私は失望を覚えた。私自身惨めで一人その上に座っていた。Ewald とその一団は私を立たせ、軽蔑的な視線をもって私をじろじろ見た。無言の訴え、尊大な権力と一体となった。彼は私を以後敵とするかもしれないと感じた。また、選手キャリア後も Recknagel は不安を抱いたと述べている。Ewald が Recknagel を恩知らずと見て(彼にメダルをもたらさなかった、彼の望むトレーナーにならなかった、従順ではなく不平を言った)、Recknagel への招待をなくしたり、彼にかかわるアンケートを操作したり、Recknagel の名前を表彰から削除したからである。Recknagel は、Ewald を視野が狭いばかりでなく、執念深い人と評している。

3) 大衆組織 DTSB の問題

従来の著作では DTSB の自立性のなさ、幹部会の形骸化などがその問題として述べられている。

るが、Recknagelはこの問題に触れていない。

4.スポーツと外交

1) 国家的承認を求めて

従来の著作では、東ドイツの国家的承認が拡大するまでスポーツ界においても承認されず、西側から多くの妨害を受けたことが述べられている。同書においても、Recknagelの表彰時における西ドイツ国歌の演奏、西ドイツによるアメリカ行きビザの発行拒否、アメリカによる東ドイツのトレーナーとジャーリストの入国拒否など、この種の妨害について多くのことが語られている。一方、Recknagelは、戦後スポーツにおける東ドイツの国際的孤立とスキージャンプ週間の成り立ちにも触れ、オーストリアが手を差し伸べてくれ、東ドイツのオーバーホフ、西ドイツのガールミッシュ・パルテンキルヘン、オーストリアのインスブルックとビショフスホーヘンでジャンプ大会が開催されることになったと述べている²⁹⁾。

2) スポーツの政治的利用

Recknagelは、冷戦の激化やハルシュタイン・ドクトリンなどがスポーツにも影響を及ぼし、政治的対決によってRecknagelのスキージャンプ週間の3連覇が不可能となったこと、1963/1964年の大会では全体的に冷戦のみが大会を支配し、東西両ドイツがボイコットしたことなどを述べている。ハルシュタイン・ドクトリンは、西ドイツがドイツ地域で唯一ドイツを代表する正当性を持つ国家であると位置づけ、ソビエト以外で東ドイツを国家承認した国家とは国交を断絶するとし、東ドイツを孤立させることを目的としていた。このことについて、Recknagelは自身をスポーツマンであって、冷戦者ではなかった、平和でフェアな競技場ではかりたかった、我々は分裂の代わりに和解を望んでいたなどと述べ、スポーツの政治的道具化を批判している。

5.ドーピング

1) ドーピングなしでも可能な最高のパフォーマンス

国家崩壊前からセンセーショナルに報じられていた東ドイツのドーピングについて、Recknagelは、この問題には原則的に答えることを拒否しているとしている。ただ、Recknagelは、ドーピングなしの最高のパフォーマンスは可能であるとし、ドーピング論議はメディアでヒステリックになされているが進歩はない、健康が善である、医学的援助は存在する、度々のコントロールと厳罰を支持するなど述べている。

6.ステートアマとプロ

1) ステートアマ批判

西ドイツからのステートアマという度々の批判に対し、Recknagelは、私はセミプロで、純粋なアマチュアではなく、国家がスポンサーであったと述べている。そして、このようなスポーツの国家的助成に対し、Recknagelは、次のように述べている。すべての国家は国際的に尊敬されたいし、その市民によって高く評価されたいのかもしれない。それにスポーツを利用することは合法である。この関連において愛国心を利用することは、今なお正しいと思う。さらに、Recknagelは、現代のスキージャンパーの不安（観衆、ジャーナリスト、スポーツ幹部、政治家をもはや満足させることができないのではないかという不安、スポーツ後の人生への不安、スポンサーによる束縛）、現代のスポーツの問題（メディアとスポンサーが大きな影響力を持つ）にも触れ、現代の著名なジャンパーであるHannawaldやSchmittの表情を見るとき私は喜びを見ないと述べている。これらのことから、Recknagelは、国がスポンサーという実践に戻ることが望ましいのではないかと、スポーツ政策において現在のスポーツメカニズムを真面目に考えるべきであると、その考えを述べている。

2) 東ドイツにおけるプロや報酬

従来の著作では、東ドイツのサッカー選手がプロであったことや、他の競技でも成果に対して報酬が支払われていたことが指摘されている。Recknagelは、1960年のオリンピック優勝

の2ヵ月後に報酬を渡されたことを明らかにしているが、このことは、東ドイツにおける報酬制度がすでに1960年以前に存在していたことを窺わせる。

7. シュタージ

1) 自身を用心深く、熟考するように変える

秘密警察である国家保安省（シュタージ）³⁰⁾によるスポーツの監視は、東ドイツの国家崩壊後、ドーピングとともにセンセーショナルに報じられた。Recknagelはシュタージという用語を用いていないが、インスブルック大会後のEwaldからの執拗な行為に対し、自身を用心深く、熟考するように変えたと述べ、シュタージの存在を仄めかしている。そして、そのような変化を彼の妻も気づいていたことが記されている。

8. ドイツスポーツの歴史的連続性

1) ハーゼンタールのスキージャンプの伝統と土壌

17人のオリンピック選手を排出したRecknagelの故郷ハーゼンタールについては、その歴史、地勢、古くからのノルウェーやホルメンコーレンとのスキーを通じた特別な関係、そこで暮らす人々が述べられているが、これらからは、東ドイツスポーツと第二次世界大戦以前のドイツスポーツとの連続性が窺える。この歴史的連続性については、Seifertも述べており³¹⁾、今後も注目していく必要があると思われる。

「DDRの社会主義身体文化（＝スポーツ）が、その生い立ちから不可避免的に、実は『ロシア的』社会主義身体文化以外のものではなかった」³²⁾という評価の再考にもかかわる問題であるからである。

9. スポーツとメディア

1) スポーツ幹部によるスポーツメディアの利用

東ドイツにおけるスポーツとメディアの関係について、従来の著作では、スポーツジャーナリストの区分、メディアによる記録や成果の賛美、メディアによるスポーツの支援、メディア

の統制などが述べられている。同書では、オリンピックメキシコ大会（1968年）後、Ewald主導の下、スポーツ幹部の指示で非常に多くの表彰があった際、Recknagelは抗議しようとしたが、スポーツジャーナリストが撒いたことがもつとで、抗議の機会は失われたと述べられている。このことは、スターであったRecknagelの動きを抑えようとスポーツ幹部がメディアを利用したことを窺わせる。

10. 国家崩壊とスポーツ

1) 指導者の責任

オリンピックソウル大会（1988年）でも優れた成績をおさめた東ドイツが翌年に崩壊し始めた。国家的崩壊とスポーツの関連に関して、従来の著作では、Honecker、Ewald等の指導者の責任が指摘されているが、同書はこのことに殆ど触れていない。

2) 国家崩壊のRecknagelへの影響

Ewaldなどによって制限されてはいたが、東ドイツ時代、一般人と比べるとRecknagelには多くの出張があり、賓客として旅した。このことが東ドイツの国家的崩壊時にRecknagelの印象を若干悪くさせた。妬みと精算の時代ではRecknagelにも多くの中傷があり³³⁾、彼の失業・再就職にも影響を及ぼしたことが述べられている。

3) 東ドイツスポーツに対する批判への反論

東ドイツ崩壊後、そのスポーツは全般的に厳しい批判に晒された。このような批判には従来の著作においても多くの反論が見られる。このことに関連して、Recknagelは、ドイツ連邦議会が「ドイツにおけるSED独裁と歴史の結果」を編集しようし、「以前の東ドイツにおけるスポーツの役割」についてRecknagelからも意見を聴取しようとした際、児童・青少年スポーツ学校にかかわるタレントの発掘やフェラインでの大衆スポーツについて話したかったが、そのアンケート（自由、政治的利用、シュタージなどからなる）に作為性を感じ、さらに、これらの答えのみで東ドイツスポーツ史を大体描くことが

できないのではないかという疑念から、その聴取に向かかなかったことや、東ドイツスポーツを支えた児童・青少年スポーツ学校は東ドイツ崩壊後すべてのものと同様不評を被っていたが、近年ドイツにおいて見直されてきていることなどを述べている。これらは、東ドイツスポーツの一方的理解や全否定に対する Recknagel の考えをあらわすものであろう。

結び

以上のように、同書の中で東ドイツスポーツに関連して多く述べられていることは、以前の著作と比較すると、類似は多いが、同書におけるソビエトの影響、サッカーの偏重に関する叙述の少なさが相違である。Recknagel の東ドイツスポーツに関する個人的見解は、他の著作と同様東ドイツ時代には語られなかったものが多く、また公文書などからでは知り得ないものも多く、貴重と言える。東ドイツスポーツのネガティブな側面とされるドーピングやシュタージュへの言及が少ないように感じられるが、Recknagel は、スポーツの政治的道具化や Ewald の権力や行為については厳しく批判している。平和とフェアな試合を望み、自らはそれを体現しようとしたが、冷戦や権力者の影響に巻き込まれた当事者 Recknagel の証言は生々しく、示唆的である。一方、Recknagel は、東ドイツスポーツのポジティブな側面として、東ドイツでのスポーツタレントの発掘や育成、選手への職業教育、スポーツの国家的援助などあげるとともに、従来の著作と同様に、東ドイツスポーツの一方的理解や全否定に対しては反論している。こうした叙述や主張には、Recknagel の生き方、ドイツ統合後も続く東ドイツ、東ドイツ市民、東ドイツスポーツに対する不当な扱い、現代スポーツにおける過度な商業主義などが反映しているように思われる。

その他にも同書には、東ドイツスポーツと第二次世界大戦以前のドイツスポーツとの連続性を窺わせる叙述など、東ドイツスポーツを理解

するための手がかりが数多く示されている。主観性や虚偽性に留意しつつ、旧東ドイツスポーツ関係者による自叙伝的著作を慎重に読み進めることは、社会主義の崩壊という時代的変革期にある我々にとって今後も必要な作業であらう。

付記

本研究は、科学研究費補助金「旧東ドイツスポーツ関係者の言説—自叙伝的著作の分析を中心に—(課題番号 20500570)」(平成 20～22 年)による研究の一部である。

註

- 1) Spitzer, G., Teichler, H.J., Reinartz, K. (Hrsg.), Schlüsseldokumente zum DDR-Sport. Ein sport-historischer Überblick in Originalquellen, Aachen, 1998.
- 2) 新村出編、『広辞苑』、第四版、岩波書店、1991、1157 頁。
- 3) Buss, W., Becker, C. (Hrsg.), Der Sport in der SBZ und frühen DDR : Genese - Strukturen - Bedingungen, Schomdorf, 2001, S.50-52.
- 4) Seifert, M., RUHM UND ELENDE DES DDR-SPORTS. Keine Bilanz - Aufgeschriebenes aus 40 Jahren eines Sportjournalisten, Berlin, 1990.
- 5) Fuchs, R., Ullrich, K., Lorbeerkrantz und Trauerflor. Aufstieg und "Untergang" des Sportwunders DDR, Berlin, 1990.
- 6) Ewald, M., Ich war der Sport. Wahrheiten und Legenden aus dem Wunderland der Sieger, Berlin, 1994.
- 7) Oertel, H.F., Höchste Zeit. Erinnerungen, Berlin, 1997.
- 8) Seyfert, G., Da muß noch was sein. Mein Leben - mehr als Pflicht und Kür, Berlin, 1998.
- 9) 齋學淳郎, 「旧東ドイツスポーツ関係者が語る東ドイツスポーツ—自叙伝的著作(1990-1998年)の分析を中心に—」, 『スポーツ史研究』, 第21号, 2008, 43～55 頁。
- 10) Recknagel, H., EINE FRAGE DER HALTUNG. ERINNERUNGEN, Berlin, 2007.
- 11) ebenda., S.9-13.
- 12) ebenda., S.15-32.

- 13) ebenda.,S.33-50.
- 14) ebenda.,S.51-70.
- 15) ebenda.,S.71-112.
- 16) Recknagel の選出に異議を唱える者はなかったとされる。
- 17) Recknagel,a.a.O.,S.113-142.
- 18) ebenda.,S.143-158.
- 19) ebenda.,S.159-176.
- 20) ebenda.,S.177-198.
- 21) ebenda.,S.199-225.
- 22) ebenda.,S.226-237.
- 23) ebenda.,S.239-241.
- 24) ebenda.,S.242-249.
- 25) Walter Ulbricht (1893-1973 年)は、1950 年から 1971 年まで SED 第一書記を務め、東ドイツの建国と初期の発展に中心的な役割を果たした。
- 26) Jens Weißflog (1964 年生まれ) は、オリンピック冬季サラエボ大会 (1984 年)、冬季リレハンメル大会 (1994 年) で優勝した東ドイツ出身の著名なジャンパーである。
- 27) Erich Honecker (1912-1994 年)は、Ulbricht の後を襲い SED 第一書記となり、東ドイツ国家崩壊寸前まで国家元首にとどまった。
- 28) Manfred Ewald (1926-2002 年) は、長きにわたっ

て東ドイツで最も影響力のあったスポーツ幹部である。

29) 東側のツール・ド・フランスとして人気を博した平和自転車競走は、1948 年にワルシャワ (ポーランド) - プラハ (当時のチェコ・スロヴァキア) 間で始まった。1952 年以後はベルリン (東ドイツ) - ワルシャワ - プラハを中心に行われることになったが、これはポーランドが東ドイツの国際的孤立に手を差し伸べたことによる。

30) シュタージ (Stasi) とは、東ドイツの秘密警察・諜報機関である国家保安省 (Ministerium für Staatssicherheit) の通称である。徹底した監視態勢で東ドイツ国民を震えあがらせるばかりでなく、西ドイツにスパイを送り込み、東西両ドイツ国民から恐れられた。東ドイツのエリートスポーツの活動もほぼすべて監視していた。

31) Seifert,a.a.O.,S.62.

32) 船井廣則、「東ドイツのスポーツとはなんだったのか」、稲垣正浩・谷釜了正編、『スポーツ史講義』所収、大修館書店、1995、120~124 頁。

33) このようなスポーツ選手への妬みと中傷は、東ドイツだけでなく、多くの旧東欧社会主義諸国家で生じた。